コンチキ号漂流記

ハイエルダール 著
神宮輝夫 訳
偕成文庫，1976年
ISBN：978-4-03-650100-7

船舶海洋工学分野の研究をしていると、北欧のなかでもノルウェーが身近になる。ノルウェーに行く際はオスロにあるコンチキ号博物館を一度は訪れるよいという話をよく聞くから、今回はハイエルダールによって書かれた「コンチキ号漂流記」について取り上げる。

この本は、1947年にノルウェーの人気学者トール・ハイエルダールら6人がバルサ草で組み立てた「いかだ」でペルーから約3ヶ月かけて太平洋を横断し、ポリネシアの島々を目指すという記録文学である。1948年に英語版の「The Kon-Tiki Expedition」が出版されてから世界中で翻訳され、映画化もされるなど非常に有名な物語である。難しい漢字は一切なくて文章も簡潔に書かれているため、一気に読むことができる一冊である。

人類学者ハイエルダールは、南太平洋の島々の民族や歴史を研究するなかで、食べ物や果物の共通性、ピラミッドや巨石像文化の類似点などからコロンブスによるアメリカ大陸発見よりはるか昔から南米とポリネシアの間に文化的交流があったのではないかという仮説をたてた。しかし、南米とポリネシアの間にはほとんど島もなく約4,000kmも離れており、飛行機や遠洋航海も不可能に近い時代には、そのような交流があったとは信じ難く、多くの人がその仮説に対して否定的であった。その後の研究を通じて、ハイエルダールは5人の仲間を集め、バルサの丸太を締めつなぎ合わせた「いかだ（コンチキ号）」で、南米ペルーからポリネシアを目指すこととなった。

ストーリーは大きく分けて航海前、太平洋横断、ポリネシア到着後に構成される。航海前、太平洋横断のための入念な情報収集と準備、仲間探しに奔走する。いかだを作るためジャングルで材料調達し、古代人と同様の方法でいかだの組み立てを行う。その当時、バルサ草で作られたいかだは水を吸いかえず、長期の航海をすることは困難と考えられていた。ペルーの港から貿易風とフンボルト海流を乗りポリネシアを目指し太平洋横断の航海が始まる。

航海中には新しい発見や、数々の苦難に見舞われる。嵐や高波の戦い、海藻生物などの未知の生物との遭遇、バルサで製作したコンチキ号の強度低下に対する不安などが詳細に記載されている。いかだ上での暮らしなどは、回遊する魚（シイラやトピオ）やブランクトなどを捕獲し食糧にしたり、ジンベエザメとの遭遇、水分補給のための対策など、太平洋横断中の日々をどのように過ごしたかが記述された。一本、単なる物語に思えてしまうが、所々にある絵画にはハイエルダールとその仲間のその当時の写真が載っており、物語が現実のものと実感させられる。

その後、数々の危機を乗り越えて101日後にポリネシアの島に到着する。ポリネシアのツアモシ島での生活、歓迎式など、その後について記してあった。この航海により、ハイエルダールらちは南米から太平洋を横断してポリネシアに渡ることは不可能ではないことを証明し、彼らの仮説に対する可能性を示した。

インターネットや本でその後のハイエルダールについて調べてみると、太平洋横断の後、ガラパゴス島やイースター島の考古学調査、華の船（ラー号）を使った大西洋航海などさまざまな場所へ探検をしている。確かにもハイエルダールをはじめ極北極点遠征を行ったナンセン、人類史上初めて南極点に到達したアムンセンなど、ノルウェーには著名な探検家が多い。自然が続く平和に暮らすノルウェーの人々に、このような情熱と開拓心があると思うと、新しさ一面を発見した気がする。

（S.T.）